

第4章

資料収集

資料収集

当博物館では、地域博物館としての機能を果たすため、資料の収集を行っています。収集した資料は、適切な処理を施し保存、系統的な整理を行い、地域の共有財産として活用することとしています。

自然史部門

自然研究グループでは、本県を中心とした地域性と一般法則を体系的に学べる地域博物館の役割を果たすための共有財産として、動物・植物・地学・天文の自然史各分野において収集活動を行なっています。

資料収集・動物分野

開館から30年にわたる資料収集活動の結果、動物分野の資料点数は15万点を越えました。これまでの30年を大きく前後半に分けると、脊椎動物分野では学芸員自らの収集活動や地域調査によって得られたものが多い傾向にあります。資料の蓄積がない状態で開館したこともあり、初期は斃死鳥獣の取得等によって地域的なコレクションの形成にも力を入れていました。昆虫分野については、国内外の基本的な種の標本を購入し、大規模な展示に対応できる一般的かつ網羅的なコレクションの形成を進めながら、同時に県内での収集活動を行ってきました。後期では県立博物館との統合に代表されるような、組織からの資料移管や個人コレクションの寄贈などが増えています。

動物分野での重要な標本としては、県内の個人や学校等から寄贈を受けたニホンカワウソ関連標本、学校から寄贈を受けた明治から昭和期の教育用標本、瀬戸内海で漂着採集された鯨類の骨格やウミガメ類剥製等があります。

資料収集・植物分野

植物分野を動物界以外の生き物と広く捉え、愛媛県の植物相を明らかにするために、愛媛県内に生育する花の咲く種子植物をはじめ、シダ植物やコケ植物、菌類、地衣類、藻類等を収集しています。

学芸員が調査研究活動によって収集した標本の他に、これまで愛媛県内で研究活動をされてき山本一氏をはじめとする芥川正次郎氏、石川早雄氏、伊藤隆之氏、上窪田康義氏、野村義弘氏、藤田幹雄氏、三好保徳氏、山本四郎氏、五十音順）等の個人コレクション（標本集）の寄贈を受けてきました。さらに平成23年度に愛媛県立博物館と統合された事で多くの標本を収集しています。



資料収集・地学分野

愛媛県産の岩石、鉱物、化石標本及び地質や地形に関する写真資料を収集しています。あわせて、特性を把握するための比較標本や、展示資料として国内外の標本の収集にも努めています。

地学分野における主な標本には、県内の市之川鉱山から産出した輝安鉱や、別子鉱山を含む県内各地の鉱山から産出した鉱物・鉱石標本、さらに愛媛県周辺の海域から産出したナウマンゾウ化石などが含まれます。

収集方法としては、調査活動を通じた採集、購入、寄贈があり、平成23年度に統合された愛媛県立博物館からの移管資料も含まれます。主な寄贈標本としては、愛媛大学・宮久三千年氏の鉱物コレクション、奥平幹一氏の鉱物コレクション、旧四国通商産業局鉱石コレクション、鶴見祥夫氏の鉱石コレクションが挙げられます。また、ナウマンゾウ化石も様々な方からの寄贈を受けています。

収集した資料については、調査、整理、データベース化を行い、インターネット上での公開を進めています。寄贈された鶴見祥夫鉱石コレクション約2,400点に関しては、資料目録を発行しました。



資料収集・天文分野

天文分野では、天体や天文現象を撮影したデジタルデータを中心に収集しています。

実物資料としては、愛媛新聞プラネタリウム関連資料や寄贈を受けた望遠鏡など、天文に関する資料を所蔵しています。



科学技術部門

科学技術の調査研究や展示等の目的のための資料を収集しています。家電製品や電話機、電球や電気部品類、ゲーム機、それら製品のカタログやパッケージ、ソフトウェアなど国内の技術の変遷がわかる製品、半導体・鉱石その他の技術材料、ホログラム等の特殊技術製品、教育や研究、試験に係る資料・機械類・試作品、県内産業の技術部品や製品、県にゆかりのある科学者・技術者の関連資料、などを工学・科学・物理・数理・生物・医学の5分野に分けて整理し、保存・管理しています。令和6年3月31日現在で5485点の資料を登録しています。



国産白黒真空管テレビ (1959年製)



8mmフィルム撮影機とフィルムカセット



多様な真空管



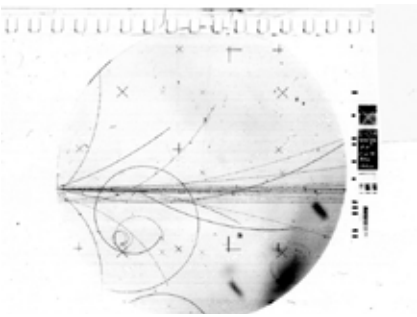
初期の国産テレビゲーム機



国産PCのパッケージ



シリコンのインゴット



1970年代に撮影された泡箱フィルム



国産ロケットM-V試験機のフェアリングカットサンプル



ホログラム資料



愛媛の工場でのみ製造されていたビデオデッキと専用カセットテープ



世界初の自動式炊飯が実現した炊飯器



愛媛県ゆかりの科学者関連資料

産業部門

愛媛県の基幹産業の変遷、産業構造の変容を把握し、過去の貴重な産業資料の散逸を防ぐため、資料を収集しています。主に愛媛県内で実際に使用されていた産業機械や道具・製品等の実物資料、またそれに付随する当時の記録資料や写真等を収集してきました。資料は収集して終わりではなく、それを基に産業史研究を進め、研究報告書で公開し、展示事業・教育普及事業へと繋げています。資料収集の方法は、主に寄贈です。地域の方々のご厚意により、博物館に多くの資料が集まりました。貴重なこれらの資料を、しっかりと後世に引き継いでいきたいと思います。



通票閉そく機：企画展「愛媛の鉄道」での展示後、産業館に展示



タービンロータ：特別展「わくわくエネルギー体験館」での展示後、屋外展示場に展示



型銀秤量器：実際に当時秤量器を扱っていた方の解説映像とともに、産業館に展示



セルロースナノファイバー関連資料：産業館に展示



曾我部右吉四阪島煙害関連資料：この資料により明治期の煙害に係る動向が明らかに



鉱山絵葉書：企画展「鉱山絵葉書写真展」での展示後、産業館に展示



木村日出雄コレクション(航空関連資料)：昭和38年以降の新聞記事スクラップブック等



海上交通関連資料：大下島アゴノ鼻灯台で平成26年7月にLED灯に更新されるまで使用された灯器



農林水産(柑橘) 関連資料：仙波寅蔵(松山)によって開発されたみかん選果機



農林水産(漁業) 関連資料：すくいちりめん漁に使用する集魚灯(水中用、海上用)



岩田コレクション(交通運輸関連写真)：伊予鉄道森松線を走行する列車(1965年)



高強力アラミド繊維及び構造発色繊維：産業館に展示

愛媛県立博物館

愛媛県立博物館は、郷土の自然を深く理解するための学習の場として昭和34(1959)年に発足(当初は愛媛県立図書館附属博物館)しました。同館は、第二次大戦後に日本各地で整備が進んだ地方自然史博物館の先駆的な存在として愛媛県内の資料を収集・研究、企画展を催したほか、自然科学の普及啓発を行う愛媛自然科学教室を運営するなど活発な活動を続けてきましたが、平成20(2008)年12月に休館、翌21(2009)年3月に閉館しました。

同館が50年間に渡って収集してきた自然史資料は20万点を超え、愛媛の博物学史を振り返る上で、重要な役割を果たしてきた先人のコレクションが多く含まれています。動物分野では昭和20年代後半から40年代にかけて愛媛県によって収集されたニホンカワウソ関連資料、県立博物館の各種コレクションの基礎を築いた楠博幸氏による昆虫を中心とした標本群のほか、昭和25年の昭和天皇四国巡幸の折に新田高校でご進講に当たった在野の研究者・村上次郎氏の貝類コレクションなどがあります。植物分野では愛媛県立博物館の設置に尽力した八木繁一氏、周桑博物同好会を主宰した余吾一角氏、愛媛植物研究会を主宰した山本四郎氏とその父・山本一氏によるコレクションがあります。またこれらのほかに、余吾一角氏が各地の研究者と交流する中で交換したと見られる膨大な標本があります。地学分野では愛媛大学で鉱床学・鉱物学の研究をしていた宮久三千年氏の鉱物コレクション、松山中学(現・愛媛県立松山東高等学校)で博物学の教師をしていた奥平幹一氏の鉱物コレクションなどがあります。

各分野の内訳は動物分野が約128,600点、植物が65,100点、地学分野が約6,600点で、休館から閉館までの3ヶ月の間に当館に移管、現在も整理を行いながら研究を進めています。



カワウソの剥製



輝安鉱



作業の様子